



Title	ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達(2) : 西ゲルマン語 (1)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 156: 1 (左) -35 (左)
Issue Date	2019-01-11
DOI	10.14943/bgsi.156.11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72450
Type	bulletin (article)
File Information	156_01_shimizu.pdf



[Instructions for use](#)

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2)

— 西ゲルマン語 (1) —

清 水 誠

On the Historical Development of Adjectival Inflection in the Germanic
Languages (2) — West Germanic (1) —

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 156. Graduate School of Letters,
Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2019. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

11. ルクセンブルク語の形容詞変化—アイフェル規則による 語末音 n の脱落, 統一変化と平行表示の発達⁵⁶

ここからは西ゲルマン語に目を転じてみよう。第11～15節では、すでに検討したドイツ語 (= 標準ドイツ語) とは異なる次の3点の特徴を示すルクセンブルク語、イディッシュ語、中期オランダ語、ペンシルヴェニアドイツ語、スイスドイツ語 (バルン方言とチューリヒ方言) を取り上げる。そして、ドイツ語の形容詞変化が現代ゲルマン語としてかならずしも典型的ではない事実を指摘し、強・弱変化の変容を考察する。

⁵⁶ 本稿は拙稿 (2018) の続編である。このほかに、残りの西ゲルマン語等を扱った続編を予定している。参考文献は初出のものに限って示す。略語の追加は次のとおり。中期オ：中期オランダ語、ペ：ペンシルヴェニアドイツ語

- ① 形容詞弱変化を特徴づける語末音 n の脱落と復元・挿入
- ② 形容詞強・弱変化の区別の消失傾向
- ③ 限定詞と形容詞の同一語尾の重複による平行表示

ルクセンブルク語：①（語末音 n の脱落と挿入一部分的） ② ③

イディッシュ語： ② ③

中期オランダ語： ② ③

ペンシルヴェニアドイツ語：①（語末音 n の脱落と復元）

スイスドイツ語： ①（語末音 n の脱落と挿入）

この節では、上記3点の特徴を備えるルクセンブルク語を取り上げる。まず、歴史言語学的に弱変化を特徴づけていた子音 n が消失する「語末音 n の脱落」（第8節参照）と関連現象について検討しよう。

語末音 n の脱落は、第9、10節で述べた北ゲルマン語だけでなく、ドイツ語を除く西ゲルマン語にも観察される。たとえばオランダ語では、一般に無アクセント音節末の -en [ə(n)] の n は、オランダ語圏北部を中心に発音しない傾向がある（オ *gouden* [γúðə(n)]（英/ド *golden*）, *helpen* [hélpə(n)]（英 *help*, ド *helfen*）, *zeventien* [zé·və(n)ti·n]（英 *seventeen*））。

語末音 n の脱落は、後続語の語頭音の種類に依存する場合もある。英語の不定冠詞 a/an（ド *ein*）を例にとろう。不定冠詞 a は、後続語の語頭音が h を除く子音の場合に、古英語の数詞 ān（英 *one*）の語末音 n が脱落し、子音全体に一般化された異形態に由来する（英 *a* book < 古英 *ān* bōc）。母音が続くと n は保たれ、an として継承された（英 *an* apple < 古英 *ān* æppel）。所有代名詞 my（ド *mein*）と mine（ド *mein*）もともに古英語の mīn にさかのぼるが、限定用法で後続語が続くと、h 以外の子音で始まる語の直前で語末音 n が脱落し、a/an と違って、h や母音で始まる語にも一般化されて my となった（英 *my* book < 古英 *mīn* bōc）。一方、後続語を伴わない独立用法では語末音 n が脱落せず、mine として継承された（英 This book is *mine*. < 古英 *mīn*）。「no + 名詞」と none の関係についても同様である。類例には、アフリカーン

ス語の不定冠詞 'n [ə]/[ən]と所有代名詞 my [mæi]/myne [máinə] (アフ 'n [ə] boek↔'n [ən] appel, 英 *a book*↔*an apple*) ; アフ *my* boek↔Hierdie boek is *myne*. (英 *my book*↔*This book is mine.*), それにイディッシュ語の不定冠詞 a/an などがある (イ *a bukh*↔*an epl*, 英 *a book*↔*an apple*)。

語末音 n の脱落が共時的な音韻規則としてはたらいっている例に、ルクセンブルク語 (ル Lëtzebuergesch) がある。ルクセンブルク語は 1984 年の言語法によって、中部ドイツ語 (ド Mitteldeutsch) に属する西モーゼルフランケン方言 (ド Westmoselfränkisch) から、ルクセンブルク大公国で唯一の国語 (ド Nationalsprache) に昇格した拡充言語 (ド Ausbausprache) である⁵⁷。第 6 節で述べたドイツ語の階層表示に対する平行表示の一例と併せて、この新興の西ゲルマン語について検討しよう。

ルクセンブルク語では、ほとんどの語末と複合語成分末の n (または nn) [n] は、後続する語または複合語成分と続けて発音すると、母音と h [h] に加えて、n と同じ歯茎音 n [n]/d [d]/t [t]/z [ts] ([dz]) の直前以外で、規則的に脱落する。この「n-削除」(ド n-Tilgung, フラ chute du -n final) は、同国の北東からドイツのライン川左岸に広がるアイフェル高原 (ド Eifel) にちなんで、「アイフェル規則」(ド Eifler Regel, フラ règle de l'Eifel) の名称で知られている。次の最後の例では、ech komme(n) 「私は来る」(ド *ich komme*) の -n は前置詞 vu(n) 「…から」(ド *von*) と続けて発音すると脱落し、区切って発音すれば脱落しない。このように、アイフェル規則は基底形で語末音 n を持つ語を対象とした音韻規則である。

ル {*en/mäin*} {Apel/Haus/Dram} ↔ {*e/müi*} {Buch/Foto/Gaart/Wee}
 a(n)/my apple/house/dream a/my book/photo/garden/way
Hien danzt. ↔ *Hie* kënnt.⁵⁸

⁵⁷ ルクセンブルクには行政言語 (ド Verwaltungssprache) とされるドイツ語とフランス語を含めて、3つの公用語 (ド Amtssprache) がある。

⁵⁸ この文の主語 hie(n) 「彼」は主格を吸収した対格 (ド *ihn*/古英 *hine*) に由来するので、語末音 n が現れている。

he dances he comes

Reen. *Reendröpsen reenzeg ↔ Reebou Reewaasser*
rain raindrops rainy rainbow rainwater

D'Oper fänkt **un.** ↔ D'Oper huet **ugefaangen.** (←*ufänke*)

the opera starts the opera has started. (←start)

ド Die Oper fängt **an.** ↔ Die Oper hat **angefangen.** (←*anfangen*)

ル Ech **komme(n)** {*vu* Paräis/*vun* Amsterdam}.

I come from Paris/from Amsterdam

一方、基底形で語末音 *n* を欠き、語源的にも根拠のない *n* が母音間で現れる場合が少数ある。これは母音連続（英 hiatus）を妨げるための「*n* の挿入」（フ “*n*” intercalaire, Schanen 2004: 175-176., Schanen/Zimmer 2006: 86）である。ただし、この「*n* の挿入」は、人称代名詞の弱形 *de* [də] 「君」（<du 主・対格, ド *du*/英 *you*）/ *se* [zə] 「彼（女）・それ（ら）」（<si 主・対格, ド *sie*）と弱形 *e(n)* [ə(n)] 「彼, それ」（<hie(n) 主・対格, ド *er/ihn*）の間に限られ、義務的に起こるわけでもない。「*n* の挿入」が起こらなければ、*de* [də] + *e(n)* [ə(n)], *se* [zə] + *e(n)* [ə(n)] という 2 語の連続は、あいまい母音 *e* [ə] の連続が 1 つに縮約されて、[də(n)], [zə(n)] のように 1 語の音韻的語（英 phonological word）になり、意味解釈の上であいまいさが生じることがある。これを避ける必要がある場合に、*de-n-e(n)* [dənə(n)], *se-n-e(n)* [zənə(n)] として両語の境界をマークするのが、任意的手段としての「*n* の挿入」の役割と言える。次例はそれが起こる場合と起こらない場合を示している。第 15 節で述べるスイスドイツ語（ベルン方言とチューリヒ方言）の広範な *n* の挿入と比較されたい。

ル Wa **se n e** bestellt hätten, häss **de n e** kennt.

Wa **s'e** bestellt hätten, häss **d'e** kennt.

if they-it ordered had had you-it known

彼らがそれを注文していたら、君はそれを知っていたら（LBW

1950-1977: 5)⁵⁹

ルクセンブルク語の形容詞変化は次表のようになる。対格形は主格形に拡張して共格（英 common case）に融合しており⁶⁰，男性単数主・対格は定冠詞 *de(n)*，形容詞強変化 *-e(n)* となる（ド 主格 *der/-er* ↔ 対格 *den/-en*）。ただし，1・2 人称代名詞は主格（ech/du/mir/dir，ド *ich/du/wir/ihr*）と対格（mech/dech/äis, eis, ons/iech，ド *mich/dich/uns/euch*）を区別するので，この点で共通するスイスドイツ語（ベルン方言とチューリヒ方言）とペンシルヴェニアドイツ語との整合性も考慮して，「主・対格」とする。属格は衰退しているので，省略する⁶¹。下線部（ ）は平行表示，矢印「←」はアイフェ規則による語末音 *n* の脱落を示す（gutt/gudd-（英 *good*），不定冠詞 *e-/eng-*（英 *a/an*），所有代名詞 *eis-*（英 *our*），定冠詞（強調形/弱形）*d-*⁶²。限定詞としての所有代名詞 *eis-* の扱いには，次表において定・不定の両方が考えられるが，ドイツ語では後続の形容詞は強変化することから，便宜的に不定に含める（言語によっては，後続の形容詞が弱変化することもある）。

⁵⁹ 例文の正書法は原典に従って示す。

⁶⁰ 対格形の主格形への拡大は，後述する低地ドイツ語の形容詞強変化（単数：主格 *en goden* Keerl ~ 目的格 *en(en) goden* Keerl）にも見られる（Schirmunski 2010 (1962): 529）。

⁶¹ Braun et al. (2005: 98) など近年の文法書も，変化表には属格を記載していない。

⁶² 定冠詞の語形については，強調形ほかに弱形も可能なときには，両方の語形を併記する。定冠詞強調形 *dee(n)/deem/där/deene(n)* と *déi/dat* は「形容詞＋名詞」の場合に用い，限定用法の形容詞を欠いた名詞と用いる場合には指示代名詞としてはたらく。*dee(n)/deem/där/deene(n)* では，代わりに弱形 *de(n)/dem/der/de(n)* も「形容詞＋名詞」の場合に用いるので，変化表には両方の語形を併記する。一方，*déi/dat* では代わりに弱形 *d'* は用いない。

単数		良い男 (男性)	良い女 (女性)	良い子供 (中性)
主・対格	不定	<u>e</u> <u>gudde</u> Mann (← <u>en</u> /gudden)	<u>eng</u> ⁶³ gutt-Ø Fra	<u>e</u> gutt Kand (← <u>en</u> /gutt-t)
		<u>eise</u> <u>gudde</u> Mann (← <u>eisen</u> /gudden)	<u>eis-Ø</u> gutt-Ø Fra	<u>eist</u> gutt Kand (←gutt-t)
	定	<u>dee/de</u> <u>gudde</u> Mann (← <u>deen</u> /den/gudden)	<u>déi</u> gutt-Ø Fra	<u>dat</u> gutt Kand (←gutt-t)
与格	不定	<u>engem</u> <u>gudde</u> Mann (←gudden)	<u>enger</u> <u>gudder</u> Fra	<u>engem</u> <u>gudde</u> Kand (←gudden)
		<u>eisem</u> <u>gudde</u> Mann (←gudden)	<u>eiser</u> <u>gudder</u> Fra	<u>eisem</u> <u>gudde</u> Kand (←gudden)
		↔ <u>guddem</u> Wäin (英 <i>good wine</i>)		↔ <u>guddem</u> Waasser (英 <i>good water</i>)
	定	<u>deem/dem</u> <u>gudde</u> Mann (←gudden)	<u>där/der</u> <u>gudder</u> Fra	<u>deem/dem</u> <u>gudde</u> Kand (←gudden)
複数				
主・対格	不定	<u>(eis-Ø)</u> gutt-Ø Männer	<u>(eis-Ø)</u> gutt-Ø Fraen	<u>(eis-Ø)</u> gutt-Ø Kanner
	定	<u>déi</u> gutt-Ø Männer	<u>déi</u> gutt-Ø Fraen	<u>déi</u> gutt-Ø Kanner
与格	不定	<u>(eise)</u> <u>gudde</u> Männer (← <u>eisen</u> /gudden)	<u>(eise)</u> <u>gudde</u> Fraen (← <u>eisen</u> /gudden)	<u>(eise)</u> <u>gudde</u> Kanner (← <u>eisen</u> /gudden)
	定	<u>deene/de</u> <u>gudde</u> Männer (← <u>deenen</u> /den/gudden)	<u>deene/de</u> <u>gudde</u> Fraen (← <u>deenen</u> /den/gudden)	<u>deene/de</u> <u>gudde</u> Kanner (← <u>deenen</u> /den/gudden)

まず、アイフェル規則の適用を確認しよう。不定冠詞 e と形容詞語尾 -e の基底形は en と -en であり、後続語の語頭音に応じて語末音 n が脱落して、e と -e となる。Mann「男」を Apel「リンゴ」/Dram「夢」で置き換えれば、

⁶³ eng は en の変化形だが、語尾に母音は伴わない。無語尾を示す「-Ø」は便宜的に省略する。

gudde は gudden となり, gudden を除けば, e/de は **en/den** となる。

- ル e gudden {Apel/Dra} ド {**ein** guter~einen guten} {Apfel/Traum}
 a good apple/dream
- ル {**en/den**} {Apel/Dra} ド {**ein/der**~einen/den} {Apfel/Traum}
 an/the apple/dream

形容詞語尾のシンタグマ表示としての役割については, 変化形の多くが語尾を伴うので, おおむね一貫していると言える。下記のように, ④中性単数主・対格の gutt は語尾 -t を伴う変化形であり (gutt ←gutt-t), 語末音が t 以外の形容詞, たとえば grouss 「大きい, 大柄の」では語尾 -t が現れる。

④ 中性単数主・対格: 語尾 -t

- ル {e/eist/dat} gutt Kand (gutt ←gutt + -t)
 a/our/the good child
- ド {ein-Ø/unser-Ø} gutes/das gute Kind
- ↔ ル {e/eist/dat} grousst Kand (grousst ←grouss + -t)
 a/our/the tall child
- ド {ein-Ø/unser-Ø} großes/das große Kind

ただし, 無語尾の場合もあり, ⑤女性単数主・対格と⑥男・女・中性複数主・対格がそれにあたる。この場合には, grouss も語尾を伴わない⁶⁴。

⑤ 女性単数主・対格: 無語尾 -Ø

- ル {eng/eis-Ø/déi} |gutt-Ø/grouss-Ø} Fra

⁶⁴ なお, 一部の慣用表現では, {schèi-Ø/dat schèi-Ø} Wieder 「すばらしい (schèi) 天気 (= いいお天気ですね)」(ド {schönes/das schöne} Wetter, 英 fine weather/the fine weather) のように, schèit の代わりに無語尾形 schèi が現れる。これには方言差もある (Schanen 2004: 170, Schanen/Zimmer 2006: 54)。

- | | | | |
|---|----------------------------|--------------|-------|
| | a/our/the | good/tall | woman |
| ド | {eine/unser e /die} | {gute/große} | Frau |
- ⑥ 男・女・中性複数主・対格：無語尾 -Ø
- | | | | |
|---|---|-------------------|------------------------|
| ル | {(eis-Ø)/d ei } | {gutt-Ø/grouss-Ø} | {Männer/Fraen/Kanner} |
| | a/our/the | good/tall | men/women/children |
| ド | (unser e){gute(n)/große(n)}/die | {guten/großen} | {Männer/Frauen/Kinder} |

さて、上記の表では、定・不定の区別に応じてひとつの表にまとめて記載している。ルクセンブルク語の形容詞変化は、限定詞を伴う場合には、それが定・不定かにかかわらず、強・弱変化の区別を欠いて1種類であり、「統一変化」(ド Einheitsflexion)に移行している (Lipold 1983: 1188)。第10節で述べた大陸北ゲルマン語では、強・弱変化の区別は複数形で失われているが、ルクセンブルク語では次の場合を除いて、語形変化全体に及んでいる。

強・弱変化の区別が残存している唯一の場合は、下記の⑦⑧男・中性単数与格である。このときに限って、ドイツ語と同様に、ルクセンブルク語の形容詞は限定詞(定冠詞・不定冠詞・所有代名詞)を欠くと強変化 -em を示し、限定詞と共にすると弱変化 -e(n) になって、区別がなされる。

⑦ 男性単数与格：強・弱変化

「Ø + 形容詞強変化 -em + 名詞」

↔「限定詞 -em + 形容詞弱変化 -e(n) + 名詞」(階層表示 -em + -e(n))

- | | | | | | |
|---|---------------------|---|-----------------------------------|--------------------|--------------------|
| ル | gud dem Wäin | ↔ | {de em /de m } | gudde Wäin | (←gud den) |
| | good wine | | the | good wine | |
| | | | {eng em /eis em } | gudde Mann | (←gud den) |
| | | | a/our | good man | |
| ド | gut em Wein | ↔ | de m gut en Wein | | |
| | | | {ein em /unser em } | gut en Mann | |

⑧ 中性単数与格：強・弱変化

「Ø + 形容詞強変化 -em + 名詞」

↔「限定詞 -em + 形容詞弱変化 -e(n) + 名詞」(階層表示 -em + -e(n))

ル *gudde^m* Waasser ↔ {*deem/dem*} *gudde* Waasser (←*guddeⁿ*)

good water the good water

{*engem/eisem*} *gudde* Kand (←*guddeⁿ*)

a/our good child

ド *gutem* Wasser ↔ *dem guten* Wasser

{*einem/unserem*} *guten* Kind

この場合を除けば、ルクセンブルク語の形容詞変化は、「限定詞 + 形容詞 + 名詞」の組み合わせの過半数で強変化語尾 (-Ø/-t/-e(n)/-em/-er) による統一変化を示す。また、下記のように、⑨女性単数与格 -er, それに⑩不定冠詞 e(n) を除く中性単数主・対格 -t では、同一の強変化語尾 -er/-t が形容詞と限定詞に現れる。形容詞と限定詞の語尾がともに -e(n) となる⑪男性単数主・対格についても、同様である。第6節で述べたように、本稿では Schanen (2004: 169-171), Schanen/Zimmer (2004: 54) にならって、これを「平行表示」(フランス語 *marquage parallèle*)、両者の語尾が異なる少数派の⑦⑧を「階層表示」(フランス語 *marquage hiérarchisé*) と呼ぶ。一方、ドイツ語では、⑨⑩、それに⑪の主格の場合に階層表示がなされる。

⑨ 女性単数与格：平行表示 (強変化語尾 -er の重複)

ル {*enger/där~der*} *gutter* Fra ↔ ド {*ainer/der*} *guten* Frau

a/the good woman

⑩ 中性単数主・対格：平行表示 (強変化語尾 -t の重複)

ル {*leist/dat*} *gutt* Kand (←*gutt-t*) ↔ ド {*unser-Ø gutes/das gute*} Kind

our/the good child

⑪ 男性単数主・対格：平行表示 (語尾 -e(n) の重複)

ル *dee~de* *gudde* Mann (←*deen~den*) ↔ ド {*der gute/den guten*} Mann

the good man

このように、ルクセンブルク語の形容詞変化は、強・弱変化の区別が大幅に失われて統一変化に傾斜し、限定詞と形容詞の語尾が強変化による同一の平行表示が過半数を占める点で、ドイツ語とはかなり異なっている。

さらに、上記の表のように、女性単数主・対格と複数主・対格では、形容詞は無語尾である。不定冠詞と定冠詞 eng/déi (ド *eine/die*, 英 *a(n)/the*) は男性単数主・対格 e(n)/dee(n)~de(n) (ド *ein/der*, 英 *a(n)/the*) とは異なる変化形なので、平行表示とは言えない。ただし、⑫ (⑤⑥参照) に示すように、所有代名詞 eis-Ø (英 *our*) はドイツ語 (ド *unsere←-unser*) と違って無語尾である。この場合には、無語尾の形容詞とともに平行表示になる⁶⁵。

⑫ 女性単数主・対格, 複数主・対格: 平行表示 (無語尾 -Ø の重複)

ル eis-Ø gutt-Ø Fra ↔ ド unsere gute Frau

our good woman

ル eis-Ø gutt-Ø {Männer/Fraen/Kanner}

our good {men/women/children}

↔ ド unsere guten {Männer/Frauen/Kinder}

したがって、ドイツ語に見られる階層表示は、不定冠詞を伴う中性単数主・対格 e (←en) gutt (←gutt-t) Kand (ド ein-Ø gutes Kind, 英 *a good child*) と上記⑦⑧の限定詞を伴う男・中性単数与格に限られる。

以上のように、ルクセンブルク語では形容詞強・弱変化の区別が大幅に失われ、統一変化が優勢である。また、多数の変化形で限定詞と形容詞が強変化の同一語尾を重複させて平行表示を示すことで、語尾の使い分けの手間を省き、ドイツ語とは異なる言語経済性を実現していると言える。語末音 n の脱落以外でも、ルクセンブルク語の形容詞変化はドイツ語とは性格が異なる。

⁶⁵ ルクセンブルク語の所有代名詞は、-n で終わる形容詞起源の mäin/däin/säin (ド *mein/dein/sein*, 英 *my/your/his*) と属格起源の hir/eis/är/hir (ド *ihr/unser/euer/ihr*, 英 *her/our/your/their*) で語形変化が異なる。前者は男性単数/中性単数の主・対格で無語尾、後者は -e(n)/-t となる。

12. イディッシュ語の形容詞変化—統一変化と平行表示の発達

強・弱変化の区別を大幅に廃して統一変化に傾斜し、限定詞と形容詞が同じ語尾を示す平行表示が主流である西ゲルマン語の例には、ルクセンブルク語のほかにも、イディッシュ語が挙げられる。

イディッシュ語は複雑な歴史的事情から地域の変異が著しい。ここでは、いわゆる標準イディッシュ語に基づき、おもな記述上の異同を注に記載して、次の変化表を検討しよう。不定冠詞は英語と同じく「a + 子音/an + 母音」である。下記の表では割愛するが、単数主格 **a guter man/a gute froy/a gut-Ø kind** (英 *a good {man/woman/child}*) の不定冠詞 a は、たとえば形容詞 **alt** (英 *old*) のような母音で始まる形容詞が後続すると、an (英 *an*) と交替して、**an alter man/an alte froy/an alt-Ø kind** (英 *an old {man/woman/child}*) となる。不定冠詞 a/an は性・格の区別なく無変化なので、無語尾 (-Ø) の表示を省略する。不定冠詞の有無によって、形容詞の語形は変わらない。定冠詞と形容詞は、男性単数で対格と与格が同形である。属格も男・中性単数で与格と同形であり、性とは無関係に名詞与格形の語末に属格標識の -s を付加する。属格は主として人間名詞と人名に用いて、所有の意味に限られる⁶⁶。ただし、使用頻度は低い。複数では属格は衰退しているので、割愛する⁶⁷。下線部 (____) は平行表示を示す。点線部 (.....) は平行表示とみなせ

⁶⁶ Jacobs et al. (1994 : 405), Jacobs (2005 : 172), 上田 (1985 : 50-55) は「possessive/所有格」という名称を用いている。Lockwood (1995 : 46) は Genitiv としている。

⁶⁷ 古風な表現になるが、あえて属格複数形を示せば、男・女・中性の順で、{Ø/di} gute meners, {Ø/di} gute froyens, {Ø/di} gute kinders となる。属格の扱いについては、Jacobs (2005 : 172), 上田 (1985 : 50-55) は単数属格のみを記載し、Jacobs et al. (1994 : 405) は単・複数属格ともに記載していない。Lockwood (1995 : 46) は単・複数属格ともに記載して、次の用例を挙げている：イ di **mentshns** penimer (←mentsh, ド *Mensch*/英 *person*) 「人々の顔」(ド *die Gesichter der Menschen*)、イ far **undzere beydns** oygen (←undzer/beyde, ド *unser/beide*, 英 *our/both*) 「私たち両者の目の前で」(ド *vor den Augen von uns beiden*) (Lockwood 1995: 110)。

る場合で、下記の説明参照 (gut- (英 *good*), sheyn-(ド *schön*, 英 *pretty/handsome*), frum-(ド *fromm*, 英 *pious*), 不定冠詞 a, 定冠詞 d-)。

単数		良い男 (男性)	良い女 (女性)	良い子供 (中性)
主格	不定	a guter man	a gute froy	a gut-Ø kind
	定	<u>der guter</u> man	<u>di gute</u> froy	dos gute kind
対格	不定	a gutn man a frumen man (英 <i>a pious man</i>) a sheynem man (英 <i>a handsome man</i>)	a gute froy	a gut-Ø kind
	定	dem gutn man	<u>di gute</u> froy	dos gute kind
		dem frumen man (英 <i>the pious man</i>)		
		<u>dem sheynem man</u> (英 <i>the handsome man</i>)		
与格	不定	a gutn man a frumen man a sheynem man	a guter froy	a gut(n) kind
	定	dem gutn man	<u>der guter</u> froy	dem gutn kind
		dem frumen man		dem frumen kind
		<u>dem sheynem man</u>		<u>dem sheynem kind</u>
属格	不定	a gutt n mans a frumen mans a scheynem mans	a gutter froys	a gut(n) kinds
	定	dem gutn mans	<u>der guter</u> froys	dem gutn kinds
		dem frumen mans		dem frumen kinds
		<u>dem sheynem mans</u>		<u>dem sheynem kinds</u>
複数				
主格	不定	gute mener	gute froyen	gute kinder
	定	<u>di gute</u> mener	<u>di gute</u> froyen	<u>di gute</u> kinder
対格	不定	gute mener	gute froyen	gute kinder

定	<u>di</u> gute mener	<u>di</u> gute froyen	<u>di</u> gute kinder
与格 不定	gute mener	gute froyen	gute kinder
定	<u>di</u> gute mener	<u>di</u> gute froyen	<u>di</u> gute kinder

形容詞語尾のシンタグマ表示としての役割については、ほとんどの変化形が語尾を伴うので、おおむね一貫していると言える。ただし、不定の中性単数主・対格は無語尾である。一方、不定の中性単数与・属格では、無語尾のほかにも語尾 -n を伴うことがある (Jacobs et al. 1994: 406, Lockwood 1995: 46)⁶⁸。語末音 n の脱落は、中性単数与・属格で語尾 -n が任意であるのほかは、とくに認められない。

さて、この表からは、イディッシュ語が中性単数主・対 (・与) 格を除いて、形容詞強・弱変化の区別を失い、統一変化に大きく移行していることがわかる。平行表示も定の限定詞を伴う場合にかかなり多く観察され、基本的に強変化語尾による。この点で、イディッシュ語はルクセンブルク語と共通しており、統一変化と平行表示への移行をさらに強めていると言える。

具体的に言えば、まず、下記のように、語尾 -er が限定詞と形容詞で重複する①定の男性単数主格と②定の女性単数与・属格が挙げられる。一方、ドイツ語はともに階層表示である。

- ① 定・男性単数主格：平行表示 (強変化語尾 -er の重複)

イ *der guter* man ↔ ド *der gute* Mann
the good man

- ② 定・女性単数与・属格：平行表示 (強変化語尾 -er の重複)

イ *der guter* froy/*der guter* froys ↔ ド *der guten* Frau
the good woman/the good woman's

⁶⁸ Jacobs (2005: 172), Lockwood (1995: 46) は不定の中性単数対格も語尾 -n を伴うことがあるとしている。一方、上田 (1985: 51-54) は不定の中性単数ですべての格を無語尾としている。

次に、下記のように、③定の男性単数対・与・属格と④定の中性単数与・属格が挙げられる。このとき、*dem gutn* {man/kind|/|mans/kinds} (ト *dem guten* {Mann/Kind}, *des guten* {Mann(e)s/Kind(e)s}, 英 *the good* {man('s)/child('s)}) は、ドイツ語と同じく階層表示である。しかし、形容詞語尾 -n は形容詞が n で終われば -em となり (イ *scheynem* ← *scheyn*, ト *schön*, 英 *handsome/lovely*), m または有アクセント母音で終われば -en となる (イ *frumen/getrayen* ← *frum/getray*, ト *fromm/treu*, 英 *pious/faithful*)。前者の語尾 -n > -em の交替は、共時的には異化 (英 *dissimilation*) によるとされるが (Lockwood 1995: 49), 歴史言語学的にはドイツ語と同じかつての与格語尾 -em に由来する。そして、この場合には、語尾 -em が限定詞と形容詞で重複する平行表示になる⁶⁹。イディッシュ語では、無アクセントの定冠詞 *dem* も直前の前置詞に前接すると、-n に弱化する現象を参照 (イ *mit dem |gutn/scheynem* | kind → *mitn |gutn/sheynem* | kind (ト *mit dem schönen Kind*, 英 *with the lovely child*) (Jacobs 2005: 174)。

③ 定・男性単数対・与・属格：平行表示 (強変化語尾 -em の重複)

- イ *dem scheynem* man ↔ ト *den/dem schönen* Mann
the handsome man
イ *dem scheynem* mans ↔ ト *des schönen* Mann(e)s
the handsome man's

④ 定・中性単数与・属格：平行表示 (強変化語尾 -em の重複)

- イ *dem scheynem* kind ↔ ト *dem schönen* Kind
the lovely child
イ *dem scheynem* kinds ↔ ト *des schönen* Kind(e)s
the lovely child's

⁶⁹ 前稿の注 50 で述べたように、フェーロー語の名詞・冠詞の与格語尾 -um [ʊn] が古ノルド語に基づいて再構された表記である事実を参照。

さらに、点線 (.....) をつけた下記⑤⑥の「*di gute* + 名詞」も、語尾母音 *i* [i] が無アクセント音節であいまい母音 *-e* [ə] に弱化したとみなせば、「*di gute* [i] > [ə] + 名詞」と解釈して、平行表示とみなすことができる。これは第2節のドイツ語についての説明と同様である (ド *d-er* [ɛɐ̯] Wein > *gut-er* [əɐ̯] > [ɐ̯] Wein, *d-as* [as] Bier > *gut-es* [əs] Bier, *d-ie* [i:] Milch > *gut-e* [ə] Milch)。一方、ドイツ語では、女性単数主・対格 (ド *die gute* [i:] > [ə] Frau, 英 *the good woman*) を除いて、いずれも階層表示になる。

- ⑤ 定・女性単数主・対・属格：平行表示 (語尾 *-i/-e* ([i] > [ə]) の重複)

イ *di gute froy* ↔ ド *die gute Frau*
the good woman

イ *di gute froys* ↔ ド *der guten Frau*
the good woman's

- ⑥ 定・男・女・中性複数主・対・与格：平行表示 (語尾 *-i/-e* ([i] > [ə]) の重複)

イ *di gute* {mener/froyen/kinder} ↔ ド *die guten* {Männer/Frauen/Kinder}/
the good men/women/children *den guten* {Männern/Frauen/Kindern}

一方、不定の表現では、不定冠詞 *a/an* はつねに無変化であり、形容詞は同じく強変化する。不定冠詞の有無によっても、形容詞の語形は変わらない。したがって、ドイツ語のような混合変化はないが、表面的には「*a/an* 無変化 + 形容詞強変化 + 名詞」という階層表示になる⁷⁰。否定冠詞 *keyn* (...nit) (ド

⁷⁰ 所有代名詞を伴う場合について補足すると、イディッシュ語の所有代名詞は名詞の前後に置くことができる。「所有代名詞 + 名詞」の語順では、所有代名詞は性・格とは無関係に単数で無変化である (イ *mayn-Ø kind*, ド *mein-Ø Kind* など, 英 *my child*)。複数ではつねに語尾 *-e* を伴う (イ *mayne kinder*, ド *meine Kinder* など, 英 *my children*)。一方、「定冠詞 + 名詞 + 所有代名詞」(イ *dos kind mayns/di kinder mayne* など, 英 *the child/children my*) の語順では、性・数・格に応じて変化する。所有代名詞を名詞の前後に置くことができる点はアイスランド語などの北ゲルマン語と同様だが、語順によって変換形が異なり、とくに名詞に後置した場合に語尾を伴う点はユニークである。これ

kein/英 *any (...)* *not*) も同様に無変化であり, 同じパターンを示す (イ *keyn guter man ... nit*, *keyn gute mener ... nit* (ド *kein-Ø guter Mann*, *keine guten Männer*)⁷¹。

13. 中期オランダ語の形容詞変化—弱変化の解消と平行表示の進展

第 11, 12 節で述べたように, ルクセンブルク語とイディッシュ語では, 形容詞の強・弱変化の区別が希薄な統一変化が顕著で, 限定詞と形容詞が同一語尾を取る平行表示が支配的であり, ドイツ語とは大きく異なっている。ここでは, 古語の例として, すでに中世期にこの 2 つの傾向を強めていた中期オランダ語 (オ *Middelnederlands* 1160/70~1500) を取り上げる。

中期オランダ語は豊富な文献を有しており, 古語の通例として書記法に自由度が高く, 語形的にかなりの異同がある。ここでは, 主として Van Royen (1995²: 58-61) に従って, 次表のようにまとめてみる⁷²。不定冠詞の有無によって, 形容詞の語形はとくに変わらない。無冠詞の場合は割愛する。下線部 (____) は平行表示, 点線部 (.....) は平行表示とみなせる場合で, 下記の説明参照 (*goed/goed-* (英 *good*), 不定冠詞 *een/ene-/e-* (閉音節 *een* では母音字 *e* を重複させる), 定冠詞 *d-*, 「古」は古形)。

単数		良い男 (男性)	良い行為 (女性)	良い家 (中性)
主格 不定		<u>een-Ø goed-Ø man</u>	<u>ene goede daet</u>	<u>een-Ø goed-Ø huus</u>
定		<u>die</u> ⁷³ <u>goede man</u>	<u>die</u> <u>goede daet</u>	<u>dat</u> <u>goede huus</u>

については, 別の機会に改めて論じる必要がある。

⁷¹ イディッシュ語は「*keyn* + 名詞 + *nit*」(英 *no* + 名詞 + *not*) のように, 二重否定を用いて表現する。

⁷² 次表では「不定」と「定」に区分するが, Van Royen (1995²: 58-59) では「強変化」(オ *sterke verbuiging*) と「弱変化」(オ *zwakke verbuiging*) に区分している。

⁷³ 定冠詞の語形は Royen (1995²: 58-59) による。*die* は指示代名詞の無アクセント形で,

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2)

対格	不定	<u>enen</u> <u>goeden</u> man	<u>ene</u> <u>goede</u> daet	<u>een-Ø</u> <u>goet-Ø</u> huus
	定	<u>den</u> <u>goeden</u> man	<u>die</u> <u>goede</u> daet	<u>dat</u> <u>goede</u> huus
与格	不定	<u>enen</u> <u>goeden</u> man(ne)	<u>enere/eenre/ere</u> <u>goedere/re/er</u> daet/dade	<u>enen</u> <u>goeden</u> huse
	定	<u>den</u> <u>goeden</u> man(ne)	<u>der</u> <u>goedere/re/er</u> daet/dade 古 <u>der</u> <u>goeden</u> daet/dade	<u>den</u> <u>goeden</u> huse
属格	不定	<u>eens</u> <u>goets</u> mans	<u>enere/eenre/ere</u> <u>goedere/re/er</u> daet/dade	<u>eens</u> <u>goets</u> huses/huus
	定	<u>des</u> <u>goets</u> mans 古 <u>des</u> <u>goeden</u> mans	<u>der</u> <u>goedere/re/er</u> daet/dade 古 <u>der</u> <u>goeden</u> daet/dade	<u>des</u> <u>goets</u> huses/huus 古 <u>des</u> <u>goeden</u> huses/huus
複数				
主格	不定	goede manne(n)	goede dade	goede huse(n)
	定	<u>die</u> <u>goede</u> manne(n)	<u>die</u> <u>goede</u> dade(n)	<u>die</u> <u>goede</u> huse(n)
対格	不定	goede manne(n)	goede dade(n)	goede huse(n)
	定	<u>die</u> <u>goede</u> manne(n)	<u>die</u> <u>goede</u> dade(n)	<u>die</u> <u>goede</u> huse(n)
与格	不定	goeden manne(n)	goeden daden	goeden huse(n)
	定	<u>den</u> <u>goeden</u> mannen	<u>den</u> <u>goeden</u> daden	<u>den</u> <u>goeden</u> husen
属格	不定	<u>goedere/re/er</u> manne(n)	<u>goedere/re/er</u> dade(n)	<u>goedere/re/er</u> huse(n)
	定	<u>der</u> <u>goedere/re/er</u> manne(n) 古 <u>der</u> <u>goeden</u> manne(n)	<u>der</u> <u>goedere/re/er</u> dade(n) 古 <u>der</u> <u>goeden</u> dade(n)	<u>der</u> <u>goedere/re/er</u> huse(n) 古 <u>der</u> <u>goeden</u> huse(n)

不定・定に応じた強・弱変化の区別は、①男性単数主格と②中性単数主・対格（中期オ goet-Ø↔goede）にしか残っていない。このときに限って、下記のように、中期オランダ語の形容詞は、不定冠詞と共起するか無冠詞の場合にはかつての名詞変化による無語尾の強変化 -Ø を示し、定冠詞と共起す

定冠詞としてもはたらく。定冠詞の語形には、現代オランダ語と同じ de もあり、den/der/des のほかに、指示代名詞の無アクセント形にあたる dien/dier/dies もあるが (Van Loey 1969⁵: 43, Van Kerckvoorde 1993: 32, Hogenhout-Mulder 1985²: 28)、本稿の変化表では割愛する。

ると弱変化 -e になって、区別がなされる。ただし、ドイツ語とは違って、形容詞は混合変化 (-Ø+ -er/-Ø+ -es) することはない。以上のほかは、限定詞の定・不定の区別とは無関係に、統一変化を示す。

① 単数男性主格：定・不定による強・弱変化の区別

「(不定冠詞 -Ø) + 形容詞強変化 (名詞変化) -Ø + 名詞」

↔「定冠詞 -ie + 形容詞弱変化 -e + 名詞」

中期オ (een-Ø) goet-Ø man ↔ **die** goede man

(a) good man the good man

↔ ド (ein-Ø) guter Mann ↔ **der** gute Mann

② 中性単数主・対格：定・不定による強・弱変化の区別

「(不定冠詞 -Ø) + 形容詞強変化 (名詞変化) -Ø + 名詞」

↔「定冠詞 -at + 形容詞弱変化 -e + 名詞」

中期オ (een-Ø) goet-Ø huus ↔ **dat** goede huus

(a) good house the good house

↔ ド (ein-Ø) gutes Haus ↔ **das** gute Haus

中期オランダ語の名詞句が階層表示を示すのは、②の定の場合 (中期オ **dat** goede huus) に限られる。上記の表で点線 (.....) をつけた①の定の場合を含む下記の③④「**die** goede + 名詞」は、第 12 節の⑤⑥で述べたイディッシュ語の場合と同様に、語尾母音 -ie [i:] が無アクセント音節であいまい母音の -e [ə] に弱化したとみなせば、「**die** gute [i:] > [ə] + 名詞」と解釈して、平行表示とみなすことができる。実際、注 73 で述べたように、定冠詞の語形には、指示代名詞としてもはたらく die のほかに、現代オランダ語と同じ de もある。一方、ドイツ語では、女性単数主・対格 (ド **die** gute [i:] > [ə] Tat, 英 *the good deed*) を除いて、いずれも階層表示である。

③ 定・男性単数主格, 女性単数主・対格：平行表示 (語尾 -ie/-e ([i:] > [ə]) の重複)

中期オ **die** goede {man/daet} ↔ ド {**der** gute Mann|/|**die** gute Tat}
 the good man/deed

- ④ 定・男・女・中性複数主・対格：平行表示（語尾 -ie/-e ([i:]>[ə]) の重複)

中期オ **die** goede {manne(n)/dade(n)/huse(n)}
 the good men/deeds/houses

↔ ド **die** guten {Männer/Taten/Häuser}

階層表示から平行表示への移行の痕跡を示すのは、かつての弱変化にあたる古形 **goeden** であり、下記の⑤定・男・中性単数属格、⑥定・女性単数与・属格、⑦定・男・女・中性複数属格に見られる。中期オランダ語では、この古形 **goeden** の弱変化語尾 (-en) に代わって、定冠詞 **des/der** の強変化語尾 (= 代名詞語尾) との類推で強変化形が形容詞 (-s/-er) に拡張し (Van Royen 1995²: 61)⁷⁴、平行表示に移行した。一方、ドイツ語では、女性単数主・対格 (ド **die gute** [i:]>[ə] Tat, 英 *the good deed*) を除いて、いずれも階層表示である。

- ⑤ 定・男・中性単数属格：平行表示 (-es + -s) < 階層表示 (-es + -en)

中期オ **des** goets {mans/huses~huus} < 古形 **des** goeden {mans/huses~huus}
 the good man's/house's

↔ ド **des** guten {Manns/Hauses}

- ⑥ 定・女性単数与・属格：平行表示 (-er + -ere/-re/-er) < 階層表示 (-er + -en)

中期オ **der** goedere/re/er daet/dade < 古形 **der** goeden daet/dade
 the good deed's

↔ ド **der** guten Tat

- ⑦ 定・男・女・中性複数属格：平行表示 (-er + -ere/-re/-er) < 階層表示 (-er + -en)

⁷⁴ Van Loey (1969⁶: 27-30), Franck (1910²: 166-170) も併せて参照。

中期オ *der goedere/re/er* {manne(n)/dade(n)/huse(n)}
 the good men's/deeds'/houses'
 <古形 *der goeden* {manne(n)/dade(n)/huse(n)}
 ↔ ド *der guten* {Männer/Taten/Häuser}

平行表示を示すのは、不定の限定詞（不定・否定冠詞，所有代名詞）でも同様である。中期オランダ語の形容詞は，限定詞の語尾との類推から本来の弱変化語尾を大部分で捨象し，限定詞の有無による定・不定の区別とは無関係に同一語尾を取る統一変化に移行している。また，限定詞との同一語尾の重複を回避する階層表示が支配的なドイツ語とは対照的に，中期オランダ語ではそれを助長する平行表示が顕著である。以上の2点で中期オランダ語，ルクセンブルク語，イディッシュ語の3言語は共通しており，ドイツ語とは大きく異なっている。

14. ペンシルヴェニアドイツ語の形容詞変化—語末音 n の脱落と復元

第11節では，ルクセンブルク語が音韻規則としてのアイフェル規則によって，語末音 n の脱落を示す事実を確認した。ここでは，基底形での語末音 n の脱落とその復元を特徴とするペンシルヴェニアドイツ語（英 Pennsylvania German）⁷⁵に言及しよう。

ペンシルヴェニアドイツ語は，1683年からアメリカ独立戦争勃発の1775年以前にかけて，ドイツ中西部のラインラント・プファルツ地方（ド

⁷⁵ 伝統的には Pennsylvania Dutch とも言う。この Dutch は Deutsch と同義である。厳密に言えば，ペンシルヴェニアドイツ語には保守的信者（英 sectarians/plain speakers）と開放的信者（英 non-sectarians/non-plain speakers）の間で相違がある。伝統的には後者が話者の多数を占めていたが，次第に英語を母語とするようになり，近年では，20～30万人（Van Ness 1944: 420）以下とも推定される話者の大多数は，前者のグループに属している

Rheinland-Pfalz) から新大陸に渡り、北米北東部のペンシルヴェニア州とその周辺およびカナダを主な居住地として、新教徒的信念を持ち続けている人々を主な基盤とする言語である。ルクセンブルク語の南に隣接する中部ドイツ語プファルツ方言 (ド Pfälzisch) を母体として、独自の言語へと発達した。形容詞変化には、ドイツ語と同じく次の3種類がある。男・女・中性単数主・対格で限定詞の語形を代表させれば、次のようになる。

- ① 強変化: 「 \emptyset + 形容詞 + 名詞」
- ② 弱変化: 「{定冠詞 *der/die/es* (英 *the*)・指示代名詞 *daer/die/des* (英 *that*), *seller/selli/sell* (英 *this*)} + 形容詞 + 名詞」
- ③ 混合変化: 「{不定冠詞 *en/en/en* (英 *a/an*)・否定冠詞 *ken (kee)/ken (kee)/ken (kee)*⁷⁶ (英 *no*)・所有代名詞 *mei/mei/mei* など (英 *my*)} + 形容詞 + 名詞」

まず、形容詞 *gut* (ド *gut*, 英 *good*) を例として変化表を示してみよう⁷⁷。人称代名詞は主格と対格を区別するが、限定詞では主・対格に融合している。属格は消滅した (不定冠詞 *en/me/re*⁷⁸, 否定冠詞 *ken* (英 *no*), 定冠詞 *d-/es/em*⁷⁹)。

強変化	良いワイン (男性)	良いミルク (女性)	良いビール (中性)
単数 主・対格	<i>guter</i> Wei	<i>guti</i> Millich	<i>gut-\emptyset</i> Bier
与格	<i>gutem</i> Wei	<i>guter</i> Millich	<i>gutem</i> Bier

⁷⁶ 若い世代では、おそらく不定冠詞 *en* との類推もはたらいて、否定冠詞として *kee* よりも *ken* を好む傾向がある (Haag 1994⁴: 28)。

⁷⁷ ペンシルヴェニアドイツ語には英語式の正書法もあるが、本稿では Haag (1994⁴) および <https://www.padutchdictionary.com/> に従って、ドイツ語式の正書法で表記する。英語式の正書法については、Miller (2013), (2014) 参照。

⁷⁸ 不定冠詞 *me/re* は本来の語幹 *en-* を欠いた語尾のみによる語形。

⁷⁹ 定冠詞 *es/em* は本来の語幹 *d-* を欠いた語尾のみによる語形。

	良い男 (男性)	良い女 (女性)	良い子供 (中性)
複数 主・対格	<i>gute</i> Männer	<i>gute</i> Weiwer	<i>gute</i> Kinner
与格	<i>gute</i> Männer	<i>gute</i> Weiwer	<i>gute</i> Kinner
混合変化	ある良い男 (男性)	ある良い女 (女性)	ある良い子供 (中性)
単数 主・対格	en-Ø <i>guter</i> Mann	en-Ø <i>guti</i> Fraa	en-Ø <i>gut(es)</i> Kind
与格	<i>me</i> <i>gute</i> Mann	<i>re</i> <i>gute</i> Fraa	<i>me</i> <i>gute</i> Kind
否定冠詞	ken (複数形を欠く不定冠詞の代用として示す)		
複数 主・対格	ken-Ø <i>gute</i> Männer (<i>kee</i> -Ø)	ken-Ø <i>gute</i> Weiwer (<i>kee</i> -Ø)	ken-Ø <i>gute</i> Kinner (<i>kee</i> -Ø)
与格	ken-Ø <i>gute</i> Männer	ken-Ø <i>gute</i> Weiwer	ken-Ø <i>gute</i> Kinner
弱変化	その良い男 (男性)	その良い女 (女性)	その良い子供 (中性)
単数 主・対格	<i>der</i> <i>gut</i> -Ø Mann	<i>die</i> <i>gut</i> -Ø Fraa	<i>es</i> <i>gut</i> -Ø Kind
与格	<i>em</i> <i>gute</i> Mann	<i>der</i> <i>gute</i> Fraa	<i>em</i> <i>gute</i> Kind
複数 主・対格	<i>die</i> <i>gute</i> Männer	<i>die</i> <i>gute</i> Weiwer	<i>die</i> <i>gute</i> Kinner
与格	<i>de</i> <i>gute</i> Männer	<i>de</i> <i>gute</i> Weiwer	<i>de</i> <i>gute</i> Kinner

さて、ペンシルヴェニアドイツ語では、基底形で語幹末に *n* を持つ形容詞は語末音 *n* が消去されるが、変化形で屈折語尾を伴うと復元される。つまり、語末音 *n* の有無は形態音韻論的(英 morphophonemic)な条件による (Van Ness 1994: 428)。たとえば上記の表で、形容詞 *gut* (ド *gut*, 英 *good*) を *schee* (ド *schön*, 英 *nice*), *glee* (ド *klein*, 英 *little*), *brau* (ド *braun*, 英 *braun*) で置き換えると、無語尾の *gut*-Ø 以外は、すべて語末音 *n* が復元されて *scheen-*, *gleen-*, *braun-* となる。*schee*~*scheen-*, *glee*~*gleen-* を例に取って、*gut* の場合と比較してみよう。

④ 強変化：中性単数主・対格 (-Ø)

↔ 男・女性単数主・対格 (-*ner*/*-ni*) (*n* の復元)

へ *schee*-Ø Bier ↔ *scheener* Wei *scheeni* Millich
nice beer *nice* wine *nice* milk

ト schönes Bier ↔ schöner Wein schöne Milch

⑤ 弱変化：男・女・中性単数主・対格 (-Ø)

↔ 男・女・中性複数主・対格 (-ne) (n の復元)

ペ	der glee-Ø Mann	die glee-Ø Fraa	es glee-Ø Kind
	the little man	the little woman	the little child
	↔die glee <u>ne</u> Menner	die glee <u>ne</u> Weiwer	die glee <u>ne</u> Kinner
	the little men	the little women	the little children
ト	der kleine/den kleinen Mann	die kleine Frau	das kleine Kind
	↔die kleinen Männer	die kleinen Frauen	die kleinen Kinder

一方、他の品詞では語末音 n の復元は起こらない。たとえば名詞では、Schtee/Zaah/Nome/Faahne (ト Stein/Zahn/Name/Fahne, 英 stone/tooth/name/flag) の複数形は無語尾の Schtee/Zeeh⁸⁰/Nome/Faahne (ト Steine/Zähne/Namen/Fahnen, 英 stones/teeth/names/flags) であり、複数形でもかつての n は復元されない。これは複数形語尾が -Ø/-er/-e/-s に限られ、かつての語尾 -n が失われていることによる。派生形容詞では、たとえば Schtee→schteenich (ト Stein→steinig, 英 stone→stony) /schteenne (ト Stein→steinern) のように n が含まれるが、名詞 Schtee の基底形として語末音 n を含む語形を設定することはできない。schteenich/schteenne は Schtee の派生語だが、派生がなされた後で語末音 n の脱落が起こり、現在では別の語として定着している。語形成による接尾辞の付加は、屈折語尾の付加と違って共時的な操作ではなく、両者は同一の語とは言えないからである。

動詞の不定詞もつねに -e [ə] で終わり、変化形で n が復元されることはない⁸¹。したがって、たとえば強変化動詞 brode (ト braten, 英 fry) の過去分詞

⁸⁰ Zeeh は Haag (1994⁴: 241) による表記。https://www.padutchdictionary.com/ では Zaeh と記載されている。

⁸¹ 次の 2 語を除く：ペ sei (ich **bin**, mir/sie **sind**) (ト sein (ich bin, wir/sie sind), 英 be (I am, we/they are)), ペ hawwe (mir/sie **hen**) (ト haben (wir/sie haben), 英 have (I have, we/they have))。少数の例として、ペ sehne—gsehne (ト sehen—gesehen, 英 see—seen)

は *gebrode* (ド *gebraten*, 英 *fried*) である⁸²。ただし、下記の⑥のように、形容詞的に限定用法で用いると、n の復元が起こる。この場合の *gebrode* の基底形は *gebroden* (*gebrodne*←*gebroden* +*-e*) とみなす必要がある。

⑥ 強変化動詞過去分詞：叙述用法 (-e) ↔ 限定用法 (-(e)n-) (n の復元)

ペ Es Oi iss *gebrode*.

the egg is fried

↔ en *gebrodnes* Oi es *gebrodne* oi (Haag 1994⁴: 161)

a fried egg the fried egg

ド Das (Spiegel-)Ei ist *gebraten*.

↔ ein *gebratenes* (Spiegel-)Ei das *gebratene* (Spiegel-)Ei

ペンシルヴェニアドイツ語の形容詞語末音 n の有無は、音韻規則としてのアイフェル規則によるルクセンブルク語の場合よりも形態論的性格が強く、より限定された範囲で起こる現象と言える。これは後述するアフリカーンス語において、語尾 *-e* の付加によって形容詞の語幹が2つの異形態を保持していることに似ている (例 77 *reg*~*regte*, オ *recht*, 英 *right*)。

15. スイスドイツ語の形容詞変化—階層表示, 語末音 n の脱落と挿入

第 11, 14 節では、ルクセンブルク語とペンシルヴェニアドイツ語の語末音 n の脱落と関連現象について検討した。ここでは、ドイツ語圏南部の諸方言の総称である上部ドイツ語 (ド *Oberdeutsch*) に属するスイスドイツ語 (ペ

のように、異分析 (英 *metanalysis*) によって語幹に n が取り込まれた動詞もある。

⁸² ペンシルヴェニアドイツ語では、ルクセンブルク語や上部ドイツ語と同じく過去形が衰退しており、一部の助動詞に限られ、過去の出来事は完了形で表す。現在分詞も消失しており、動詞の語形は基本的に「不定詞—現在形—過去分詞」からなる。

Schwyzerdütsch⁸³) について、語末音 *n* の脱落と挿入が基底形とは無関係に大幅に拡張している例として、代表的な2つの方言を検討してみよう。スイスドイツ語は、上部ドイツ語の西側を占めるアレマン方言 (ド Alemannisch) に属するスイス領内の複数の方言の総称で、統一的な方言は存在しない。取り上げるのは、西部のチューリヒ方言 (正確には「ツューリヒ方言」, チュ Züritütsch) と東部のベルン方言 (ベ Bärndütsch) であり、次表のようにまとめられる。属格は消失している (guet- (英 *good*), 不定冠詞 *e-* (強・混合変化), 定冠詞 *d-/e-* (弱変化))⁸⁴。

ベルン方言：

強・混合変化			
	ある良い男 (男性)	ある良い女 (女性)	ある良い子供 (中性)
単数 主・対格	<i>e guete Maa</i> (<i>gueten</i> + 母音) (<i>en</i> + 母音)	<i>e gueti Frou</i> (<i>en</i> + 母音)	<i>es guets Chind</i>
	与格 <i>emene</i> ⁸⁵ <i>guete Maa</i> (<i>gueten</i> + 母音) (<i>emenen</i> + 母音)	<i>enere guete Frou</i> (<i>gueten</i> + 母音) (<i>eneren</i> + 母音)	<i>emene guete Chind</i> (<i>gueten</i> + 母音) (<i>emenen</i> + 母音)
	良いワイン (男性)	良いミルク (女性)	良いビール (中性)
	↔ <i>guetem Wy</i>	↔ <i>gueter Milch</i>	↔ <i>guetem Bier</i>
複数 主・対格	<i>gueti Manne</i>	<i>gueti Froue</i>	<i>gueti Chind(er)</i>
	与格 <i>guete Manne</i> (<i>gueten</i> + 母音)	<i>guete Froue</i> (<i>gueten</i> + 母音)	<i>guete Chind(er)</i> (<i>gueten</i> + 母音)

⁸³ 標準ドイツ語では Schweizerdeutsch となる。これはドイツ、オーストリアから区別されたスイスでのドイツ語の標準変異 (ド Standardvarietät) という意味ではない。

⁸⁴ 標準ドイツ語と違って、所有代名詞を伴うと形容詞は弱変化する。

⁸⁵ 不定冠詞には、男・女・中性単数与格で短形 *eme/ere/eme* (*{emen/eren/emen}* + 母音) がある。男・中性単数与格 *emene* (<古高ド *einemu*) は、*-mene*<*-neme* の音位転換 (ド Lautumsprung, Marti (1985: 79)) による。

弱変化	その良い男 (男性)	その良い女 (女性)	その良い子供 (中性)
単数 主・対格	<i>der</i> guet-Ø Maa	<i>di</i> ⁸⁶ guet <i>i</i> Frou	<i>ds</i> guete Chind (gueten + 母音)
与格	<i>em</i> guete Maa ⁸⁷ (gueten + 母音)	(d) <i>er</i> guete Frou (gueten + 母音)	<i>em</i> guete Chind (gueten + 母音)
複数 主・対格	<i>di</i> guete Manne ⁸⁸ (gueten + 母音)	<i>di</i> guete Froue (gueten + 母音)	<i>di</i> guete Chind(er) (gueten + 母音)
与格	<i>de</i> guete Manne (gueten + 母音) (den + 母音)	<i>de</i> guete Froue (gueten + 母音) (den + 母音)	<i>de</i> guete Chind(er) (gueten + 母音) (den + 母音)

チューリヒ方言：

強・混合変化	ある良い男 (男性)	ある良い女 (女性)	ある良い子供 (中性)
単数 主・対格	<i>en</i> guete Maa (gueten + 母音)	e guet <i>i</i> Frau (en + 母音)	e ⁸⁹ guets Chind (en + 母音)
与格	<i>emene</i> ⁹⁰ guete Maa (gueten + 母音) (emenen + 母音)	<i>enere</i> guete Frau (gueten + 母音) (eneren + 母音)	<i>emene</i> guete Chind (gueten + 母音) (emenen + 母音)
	良いワイン (男性)	良いミルク (女性)	良いビール (中性)
	↔guet <i>em</i> Wii	↔guet <i>er</i> Milch	↔guet <i>em</i> Pier

⁸⁶ 定冠詞 *di* は形容詞を伴わない場合には、語尾を欠く *d* となる (べ *d* Frou, 卜 *die* Frau)。

⁸⁷ 定冠詞 *em* は語幹 *d-* を欠く語尾のみによる語形である。チューリヒ方言も同様。女性形 (d)*er* では語幹 *d-* を伴う語形もある。標準ドイツ語では、語尾のみによる定冠詞の語形は、主として前置詞との融合形 (例 卜 *zum* ← *zu dem*, *zur* ← *zu der*) に現れる。

⁸⁸ 定冠詞 *di* は男・女・中性複数に共通して、形容詞を伴わない場合には *d* となる (べ *d* {Manne/Froue/Chind(er)}, 卜 *die* {Männer/Frauen/Kinder})。

⁸⁹ 不定冠詞 *e* は形容詞を伴わない場合には *es* となる (ふ *es* Chind, 卜 *ein* Kind)。

⁹⁰ 不定冠詞には、男・女・中性単数与格で短形 *eme/ere/eme* (*emen/eren/emen* + 母音) がある。注 85 で述べたように、ベルン方言と同じく、男・中性単数与格 *emene* (<古高 卜 *einemu*) は *-mene* < *-neme* の音位転換による。

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2)

複数 主・対格	guet(i) ⁹¹ Mane	guet(i) Fraue	guet(i) Chind
与格	guete Mane (gueten + 母音)	guete Fraue (gueten + 母音)	guete Chind (gueten + 母音)
弱変化	その良い男 (男性)	その良い女 (女性)	その良い子供 (中性)
単数 主・対格	de guet(i) ⁹² Maa (der + 母音)	di ⁹³ guet(i) Frau	s ⁹⁴ guet(i) Chind
与格	em guete Maa (gueten + 母音)	de guete Frau (gueten + 母音) (der + 母音)	em guete Chind (gueten + 母音)
複数 主・対格	di ⁹⁵ guete Mane (gueten + 母音)	di guete Fraue (gueten + 母音)	di guete Chind (gueten + 母音)
与格	de guete Mane (gueten + 母音) (den + 母音)	de guete Fraue (gueten + 母音) (den + 母音)	de guete Chind (gueten + 母音) (den + 母音)

両方言はルクセンブルク語と違って、強・弱変化の区別については、一部で同形の場合もあるが、原則として保っている。ベルン方言の強・混合変化中性単数主・対格 *es guets Chind* ↔ ド *ein-Ø gutes Kind* (英 *a good child*) が平行表示である点は、階層表示の標準ドイツ語と異なっている。しかし、全体として見れば、両方言ともに平行表示への片寄りとはとくに認められない。

両方言ともに男・女・中性単数与格では、下記のように、限定詞としての不定冠詞の有無によって形容詞の語形が異なる。限定詞がなければ、形容詞

⁹¹ 強変化複数主・対格の語尾 -i は 3 性ともに近年の発達による (Weber 1987³: 123)。

⁹² 弱変化単数主・対格の語尾 -i は 3 性ともに近年の傾向であり (Weber 1987³: 122)、無語尾という記載も散見される (Baur 1997¹¹: 59, Schobinger 2001²: 50)。

⁹³ 定冠詞 di は形容詞を伴わない場合には d となる (♢ d Frau, ♪ die Frau)。

⁹⁴ 定冠詞 s は語幹 d- を欠く語尾のみによる語形である。定冠詞 em も同様で、ベルン方言にも例がある。

⁹⁵ 定冠詞 di は男・女・中性複数に共通して、形容詞を伴わない場合には d となる (♢ d {Mane/Fraue/Chind}, ♪ die {Männer/Frauen/Kinder})。

は強変化語尾 -em/-er/-em を示し、限定詞を伴うと、形容詞は弱変化語尾 -e(n) を示す⁹⁶。つまり、限定詞と形容詞は相補分布的に強変化語尾 -em/-er/-em を選択する。これは標準ドイツ語の混合変化にあたり、階層表示の一例である。

① 混合変化：男・女・中性単数与格

「不定冠詞 -mene/-ere/-mene + 形容詞弱変化 -e(n) + 名詞」

⇔「∅ + 形容詞強変化 -em/-er/-em + 名詞」

男性：ベ/チユ *emene* guete Maa ⇔ *guetem* {Wy/Wii}

a good man good wine

ド *einem* guten Mann ⇔ *gutem* Wein

女性：ベ/チユ *enere* guete {Frou/Frau} ⇔ *gueter* Milch

a good woman good milk

ド *einer* guten Frau ⇔ *guter* Milch

中性：ベ/チユ *emene* guete Chind ⇔ *guetem* {Bier/Pier}

a good child good beer

ド *einem* guten Kind ⇔ *gutem* Bier

次に、形容詞語尾のシンタゲマ表示としての役割を検討しよう。ベルン方言では、弱変化男性単数主・対格 *der* guet-∅ Maa (ド *der* gute Mann, 英 *the good man*) を除いて、形容詞がすべての語形で語尾を伴う。チューリヒ方言でも、注 91, 92 で述べたように、強・混合変化複数主・対格 *guet(i)* Mane/Fraue/Chind (ド *gute* Männer/Frauen/Kinder, 英 *good men/women/children*) の語尾 -i と弱変化男・女・中性単数主・対格 *de* guet(*i*) Maa/Frau/Chind (ド *der* gute Mann ~ *den* guten Mann/*die* gute Frau/*das* gute Kind, 英 *the good man/woman/child*) の語尾 -i は、ともに近年の傾向である。そ

⁹⁶ 注 85, 90 の繰り返しになるが、不定冠詞の単数男・中性与格 *emene* (<古高ド *einemu*) は -neme>-mene の音位転換による。

の結果、形容詞の無語尾形はなくなりつつある。これには標準ドイツ語の影響が指摘されている (Weber 1987³: 122)。

以上のことから、両方言では全体として標準ドイツ語と同じく、平行表示はわずかで、階層表示が支配的であることがわかる。また、両方言の形容詞変化は標準ドイツ語の影響を受けつつ、無語尾形をなくして、名詞句のシンタグマ表示の役割を強めつつあると言える。

さて、スイスドイツ語ベルン方言とチューリヒ方言の形容詞変化を標準ドイツ語から隔てるのは、語末音 *n* の脱落である。その結果、第 9, 10 節で述べた北ゲルマン語と同じく、両方言の弱変化語尾は母音で終わる。スイスドイツ語の両方言は、2 種類の母音 *-e* [ə]/*-i* [i] による語尾を示す。語尾 *-e* は後続語の語頭音が母音の場合に、本来の弱変化を特徴づける *n* が加わって、一律に *-en* [ən] となる。一方、語尾 *-i* には *n* が加わることはない。

語尾 *-e* ~ *-en* の交替は、一見、第 11, 14 節で述べたルクセンブルク語とペンシルヴェニアドイツ語の語末音 *n* の脱落および復元を連想させる。しかし、スイスドイツ語の両方言では、基底形に *n* が存在せず、語源的にも根拠がない場合にまでそれが及んでいる。スイスドイツ語の両方言では、「語末音 *n* の脱落」の復元は「語末音 *n* の挿入」というべき現象に変質し、その使用を拡張させていると言える。

たとえば、下記の②のように、混合変化男・女・中性単数与格では、母音で始まる後続語 (ベ/チ *alt/Öpfel/Uhr, Uhr/Ei, Äi*, ド *alt/Apfel/Uhr/Ei*, 英 *old/apple/watch/egg*) の直前で *n* が復活して、形容詞弱変化語尾 *-e* が *-en* となる (ベ/チ *gueten←guete* (ド *guten*) < 古高ド *guoten*)。ところが³、それだけでなく、本来、*n* で終わらないはずの不定冠詞の語尾 *-e* も *n* が挿入されて *-en* となる (ベ/チ *emenen←emene, eneren←enere* (ド *einem, einer*) < 古高ド *einemu, eineru*)。

② 混合変化：男・女・中性単数与格

「不定冠詞 *-mene/-ere/-mene* + 語頭子音：形容詞弱変化 *-e* + 子音：名詞」

⇔「不定冠詞 -menen/-eren/-menen + 語頭母音：形容詞弱変化 -en + 母音：名詞」(nの挿入)

ベ/チ	emene guete Maa	enere guete Frou/Frau	emene guete Chind
	a good man	a good woman	a good child
ド	ein em guten Mann	einer guten Frau	ein em guten Kind
ベ/チ	emenen <u>alten</u> <u>Öpfel</u>	eneren <u>alten</u> Uhr/Uur	emenen <u>alten</u> Ei/Äi
	an old apple	an old watch	an old egg
ド	ein em alten Apfel	einer alten Uhr	ein em alten Ei

また、ベルン方言では、下記の③のように、本来、nで終わらないはずの形容詞弱変化中性単数主・対格 -e でも、母音で始まる語 (ベ Ei, ド Ei, 英 egg) の直前で n が挿入されて -en となる (ベ guete → gueten (ド gute) < 古高ド guota)。

③ 弱変化：中性単数主・対格

「定冠詞 -s + 形容詞弱変化 -e + 語頭子音：名詞」

⇔「定冠詞 -s + 形容詞弱変化 -en + 語頭母音：名詞」(nの挿入)

ベ	ds guete Chind ↔ ds guet <u>en</u> Ei
	the good child the good egg
ド	das gute Kind das gute Ei

以上の事実は、n が本来の不定冠詞語尾と形容詞弱変化語尾とは無関係に、類推によって母音連続の回避手段として再解釈されたことを示している。

下記の④に示すように、チューリヒ方言では、弱変化の男性単数主・対格 de guet(i) Maa と女性単数与格 de guete Frau の定冠詞 de は、後続語が母音で始めると **der** になる (チ **der** alt(i) Maa (ド **der** alte Mann), チ **der** alte Frau (ド **der** alten Frau))。これはこの de の基底形が -r を伴うことによる r の復元である。このように、n の挿入は母音連続でまったく機械的に起こるわけではない。しかし、そのような例は少数にとどまる。

ところが、古高ドイツ語で1人称単数形語尾が-nではなかった強変化動詞についても、スイスドイツ語の両方言ではnの挿入が起こる。つまり、ここでもnの挿入は、類推によって母音連続の回避手段として再解釈されている。-n + i [ni]という音節境界の移動は共通しており、以下の場合でも同様に起こる。

べ i nime (<古高ド ih nimu, ド ich nehme) → nimeni (ド nehme ich)
 I take take I
 i gibe (<古高ド ih gibu, ド ich gebe) → gibeni (ド gebe ich)
 I give give I

ほかにも、nの挿入が基底形とは無関係に母音連続の回避手段としてはたつき、場合によっては異形態として定着した例がある。ベルン方言の例を見てみよう。

べ De non e gueten Aabe! それではごきげんよう (晩の別れの挨拶)
 then still a good evening
 ド Dann noch einen guten Abend!

Aabe「晩」(ド Abend)を子音で始まるMorge「朝」(ド Morgen)に置き換えると、形容詞 gueten「良い」(ド guten)が gueteに変わって、De non e guete Morge! (ド Dann noch einen guten Morgen!)となる。一方、guetenがなければ、不定冠詞 e (ド einen)が母音の前で enに変わって、De non en Aabe! (ド Dann noch einen Abend!)となる。non「まだ」(ド noch)がなければ、de「それでは」(ド dann)が母音の前で denに変わって、Den e gueten Aabe! (ド Dann einen guten Abend!)となる。カッコ内の標準ドイツ語の語形からわかるように、gueten/en/denの語末音nは少なくとも語源的には根拠がある。ところが、non e (ド noch einen)では、no「まだ」(ド noch)は標準ドイツ語のnochの-ch[x]が脱落した語形であり、語末音nは語源的に

根拠がない。子音で始まる語が続くと, I chume no so gār̄n. 「私は大喜びで参りますよ」(ド Ich komme noch so gern.) となり, n はつかない。単独でも no としかならない⁹⁸。このように, non の語末音 n は, 母音連続の回避手段としての自由な n の挿入による。なお, none のように先行語の語末に n を添えるのは, 動詞の場合と同じく正書法上の便宜であり, 発音上は n は後続語の音節初頭にあつて, [nɔ̄\$nə] となる。次の für ne (ド für einen) の正書法を参照。

さらに, 子音で終わる前置詞の直後では, 不定冠詞 e(n) についても, für ne Maa 「ある男のために」(ド für einen Mann) ↔ e Maa 「ある男を」(ド einen Mann) のように, 語源的に無縁の語頭音 n が現れる。母音で始まる人称代名詞 ech 「君たち (対・与格)」(ド euch), is 「私たち (対・与格)」(ド uns) も, mit nech 「君たちと」(ド mit euch), uf nis 「私たちに向かつて」(ド auf uns) となる (Marti 1985: 92)。このように, 母音で始まる機能語である不定冠詞や人称代名詞は, 母音連続の回避手段とは別に, 語頭音 n を伴う接語 (英 clitic) としての異形態を発達させている。

第 11 節で述べたように, 基底形に存在せず, 語源的にも無縁の n の挿入は, ルクセンブルク語にも見られるが, 一部の人称代名詞弱形の連続に限られ, 義務的でもない。スイスドイツ語の n の挿入は, 母音連続の回避手段として再解釈されて多用され, 一部の機能語ではこれとは無縁の条件で異形態を生んでいる。

このように, 歴史言語学的に形容詞弱変化を特徴づけてきた子音 n は, 現代ゲルマン語では, その性格を様々に変容させている。まず, 第 9, 10 節で扱った北ゲルマン語では, 語末音 n は規則的に消失している。後述するように, オランダ語, 西フリジア語, アフリカーンス語でも, 形容詞語尾は語末音 n を欠いている。一方, ルクセンブルク語では, アイフェル規則という音韻的条件に応じて語末音 n の脱落が起こり, 基底形に存在しない語末音 n の

⁹⁸ この例の no (ド noch) は「まだ」の意味ではなく, 話者の気持ちを表す話法詞 (ド Modalpartikel) であり, しいて訳せば「…よ」となる。

挿入が母音連続を避ける場合に一部で見られる。ペンシルヴェニアドイツ語でも語末音 n の脱落が見られるが、形態音韻論的に条件づけられており、基底形で語幹末に n が存在している語では、変化語尾が付加されると n が復元される。さらに、スイスドイツ語のベルン方言とチューリヒ方言では、ルクセンブルク語でも部分的に見られる語末音 n の挿入が母音連続の回避手段として再解釈され、その他の場合を含めて、大幅にその使用を拡張させていることがわかる。

参考文献

- Baur, Arthur. 1997¹¹ (1969). *Schwyzertütsch «Grüezi mitenand»: Praktische Sprachlehre des Schweizerdeutschen für Kurse und den Selbstunterricht*. Winterthur: Gensberg.
- Braun, Josy/Johanns-Schlechter, Marianne/Kauffmann-Frantz, Josée/Losch, Henri/Magnette-Barthel, Geneviève. 2005. *Grammaire de la langue luxembourgeoise*. Mamer: Imprimerie Graphic Press/Ministère de l'Éducation nationale et de la Formation professionnelle.
- Franck, Johannes 1910² (1883). *Mittelniederländische Grammatik mit Lesestücken und Glossar*. Leipzig: Tauchnitz.
- Haag, Earl C. 1994⁴. *A Pennsylvania German Reader and Grammar*. University Park and London: Pennsylvania State University Press.
- Hogehout-Mulder, Maaïke. 1985² (1983). *Cursus Middelnederlands*. Groningen: Wolters-Noordhoff.
- Jacobs, Neil G. 2005. *Yiddish. A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacobs, G. Neil/Prince, Ellen F./Van der Auwera, Johan. 1994. Yiddish. In: König/Van der Auwera (eds.), 388-419.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.). 1994. *The Germanic Languages*. London/New York: Routledge.
- LBW: *Luxemburger Wörterbuch*. 1950-1977. Linden: Institut Grand-Ducal.
- Lockwood, W. B. 1995. *Lehrbuch der modernen jiddischen Sprache*. Hamburg: Buske.
- Marti, Werner. 1985. *Berndeutsche Grammatik*. Bern: Francke.
- Miller, D. 2013. *Pennsylvania German Dictionary*. Deitsh Books.
- Miller, D. 2014. *Pennsylvania German. Vitt Du Deitsch Shvetza?* Deitsh Books.
- 清水 誠 2018 「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (1) — ゴート語, ドイツ語, 北ゲ

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2)

- ルマン語 —」『北海道大学文学研究科紀要』155. 1-54.
- Schobinger, Viktor. 2001² (1984). *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: pendo-verlag.
- 上田和夫 1985 『イディッシュ語文法入門』(大学書林)
- Van Kerckvoorde, Colette. 1993. *An Introduction to Middle Dutch*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Van Ness, Silke. 1994. Pennsylvania German. In: König/Van der Auwera (eds.), 420-438.
- Van Loey, A. 1969⁶ (1960-62). *Middel nederlandse spraakkunst. I. Vormleer*. Groningen: Wolters-Noordhoff.
- Van Royen, Machteld. 1995² (1990). *Klank- en vormleer van het Middel nederlandse*. Groningen: Universiteitsdrukkerij, Rijksuniversiteit Groningen.
- Weber, Albert. 1987³ (1948). *Zürichdeutsche Grammatik: Ein Wegweiser zur guten Mundart*. Zürich: Verlag Hans Rohr.

* 拙稿 (2018) の誤植

p. 50 Barnes, Michael P./Weyhe, Eivind 1990>…1994

* 本研究は科研費 (26370471) の助成によるものである。